

目的 化学調味料や風味調味料などの人工調味料の開発が進められ、手軽に天然調味料に近い味が得られるようになった。また、市販の加工食品には必ずといって良い程人工調味料が添加されている。合成品の味に慣らされている現代人がどのように人工調味料をとらえているかを明らかにするために、本調査を行った。

方法 東京都、秋田市、徳島市、とその近郊に在住の主婦1200名を対象として、昭和56年7月、11月に人工調味料の使用状況およびそれらと健康との関連について調査をした。

結果 有効回答数は899であった。人工調味料は88%の家庭で使用されていた。過去に使用したことはあるが現在は使用していないという家庭は11.2%、使用経験の全くない家庭は0.8%であった。使用している者の人工調味料に対する感想は、「簡単で便利」が80.9%と多く、次に「風味もよくおいしい」32.8%であった。表示されている量を守っているかという設問では83.7%が「目分量で使っている」と答え、あり、「計量して使っている」という者は55%に過ぎなかった。人工調味料を使っていない者の意見としては、「健康に対する配慮から」が大部分で82%であった。人工調味料と健康とのかわり合いについての設問では、使用者は「適量ならば関係ない」と答えた者が73.7%で、無使用者は「健康のために悪い」と答えた者が76.4%であった。しかし、「適量ならば関係ない」と答えた者の中でも、食品添加物については35%の者が「健康に悪い」と答えているところからみると、人工調味料と食品添加物とは別のものとして考えているようである。